

第139回 フランス・アラカルト (5/27) 報告

「十津川村で働くジョラン・フェレリさんを迎えて」

ジョランさんは1992年、フランス・グルノーブル生まれで、2014年に来日、兵庫県にある大学院で学ばれ、現在、十津川村役場の産業課で林業関係の仕事をされています。今回は、日本の森林の性格、林業のあり方について、フランスと比較しながら、わかりやすく説明していただきました。



日本の森林の代表的特徴は、吉野杉や京都の北山杉に見られる植林された単層林で、単位面積当たりの樹木数が多く、真直ぐに伸びた、節の少ない、付加価値の高い木材（例えば床柱）を生産できること。その反面、植林、間伐など、手間とコストがかかり、外材の輸入による価格下落により、その維持が難しくなっている。しかも、下草が生えにくく災害に弱い。一方、フランスでは、植林は行わず、自然のサイクルに任せた多様性に溢れた混交林になっていて、維持コストは低く、災害などにも強い森林になっているとのこと。ジョランさんは、こうした日本の林業の危機の現場に立ち、ヨーロッパの林業に学び、日本の林業とつなぐ架け橋になりたいと、日々、十津川村で奮闘されているとのことでした。

後半は、宇陀市室生在住のシルヴァン・シャボールさんと育さんご夫妻に会場で焼いていただいたガレット（そば粉を焼いたクレープでブル

ターニュ地方の名物料理）をいただきながら、河野美紀子さんのよし笛の演奏と、杉谷健治さん、大内隆一さん、ピエール・レニエさんによるアーサー王伝説に由来する「円卓の騎士の歌」が披露され、参加者全員で合唱をして、和やかな時を過ごしました。会場には、井田眞弓さんご主人が経営されている「モミの木デイサービス」を使わせていただきました。広々とした部屋で、テラスからは薔薇の花咲く庭園を眺めることができ、ゆったり寛ぐことができました。井田さんご夫妻にはこの場を借りてあらためて御礼申しあげます。

(寒河江康夫)



Cette réunion amicale de l'association franco-japonaise de ce 27 mai fût une première pour moi. Une rencontre en toute simplicité où j'ai pu m'exprimer sur ma vie au Japon et sur les différences/similarités que l'on peut être amené à rencontrer dans nos forêts en France et au Japon. Près de 30 personnes ont assisté à l'événement où nous avons échangé autour de chants et des galettes Méli-Mélo (un régal !). Le centre Momi-No-Ki, dont nous avons pu bénéficier, est idéalement placé dans le centre de Nara, à 10 min à pied de la gare. Une première... mais pas la dernière ! À bientôt. Si vous voulez, venez à Totsukawa !

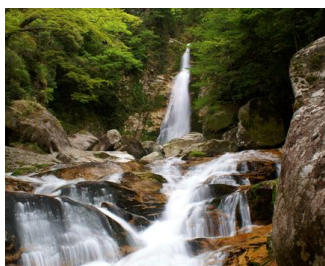
奈良日仏協会の催しに参加したのは、今回が初めてでした。日本での私の暮らしや仕事、フランスと日本の森林の相違点と類似点についてお話することが出来ました。30人近い方が参加し、歌を唄ったり、ガレットを味わったりして、交流を深めることもできました。会場となった「モミの木デイサービス」は近鉄奈良駅から歩いて10分ほどの理想的な場所にあります。今回は初めての参加でしたが、これが最後の機会になりませんように！また、お会いしましょう。みなさま、よろしければ十津川にもぜひお越しください！(Jolan Ferreri)



果無峠



野猿



大小様々の滝



瀬峡

◆◆◆数年前、十津川・熊野川流域で大水害のあった翌年、十津川村に泊まりました。周辺を歩いて、河川の氾濫はまるで津波のようだったとの実感がありました。その十津川で、フランスからの若者が林業に関わる仕事に従事し、奈良市へは車で2時間半だったと、事も無げに語りました。かく言うジョランさんを中心に歓談し、しばし異文化の空気に浸りました。私のよし笛での「サリーガーデン」は、そんな気分ちょうど合っていたのかなと、あとで想いました。まだ子供と言える年頃のこと、厳しい生活が背後にあって、母が「流転よね」とつぶやいたのが胸に刻まれています。「サリーガーデン」の歌詞に、♪かなしみの時ほど、しなやかにわらいましょう。柳の枝ゆれる、ふるいあの庭で…♪、とあります。「サリー」は「柳」のことだと知りました。柳のようにしなやかに生きる。事も無げにわらいながら——♪ (河野美紀子)

◆◆◆近年、日本においては、林業に職を求める若者は少なく、日本の林業の将来が危ぶまれている。そんな中、あの辺鄙な十津川村で林業関係の職についているという若者がいる。しかも、フランスからやって来た若者だ。彼は、堪能な日本語で語る。日本の森は暗いと。その理由の説明も明快だ。狭い間隔で植林する。それは、下枝を付けさせないで、上へ上へと伸長させるため。そうすれば、節のない真っ直ぐな木材が得られるから。しかし、この生産方式は、間伐という手間が必須。今の日本では後継者がなく、山は放置されたままだ。だから、森は暗くなる。一方、フランスの林業は、自然に芽生え、育った森林から木を伐採する。植林もしない。一面伐採するというのもしない。適当な間隔をおいて切りだす。だから、フランスの森は、陽が差し込み明るい。話は、これで終わらない。木材の生産方式の比較へと続く。日本の林業は、このように人手をかける生産方式だから、コスト高になり、競争力を失った。フランスの方式は、自然の営みを活用したやり方だから、コストがかからない。自然との共存、環境保護にも通じると。日本人は、木に対する価値観そのものを変えないと、日本の林業は生き残れないと教えられた。彼は、日本とフランスの懸け橋になりたいと語った。また、フランスには帰らないとも言った。日本の林業の救世主、希望の星とならんことを願う。(竹本寿史)

◆◆◆J'ai été très heureux de participer à cette conférence, j'ai pu ainsi faire découvrir aux participants les galettes de sarrasin. J'ai apprécié aussi de pouvoir rencontré à nouveau des amoureux de la langue et de la culture française et de pouvoir échanger avec mes compatriotes et amis francophones sur la vie au Japon. Si vous voulez avoir plus d'informations vous pouvez consulter notre blog : <https://brog-melimelo.tumblr.com>



講演会に参加して楽しかったです。参加者のみなさんにそば粉のガレットを知ってもらうことができました。そしてまた、フランス語とフランス文化が好きな人たちと新たに出会うことができ、日本の生活について同じフランコフォンたちと交流できたのもよかったです。よろしければ、私たちのお店「Méli-Mélo メリメロ」のブログ(上記アドレス)をのぞいてみてください。

(Iku & Sylvain Chabrol 育&シルヴァン・シャボール)

◆◆◆Merci à tous les membres de l'organisation franco-japonaise de NARA. J'ai vraiment eu beaucoup de plaisir à participer à la petite réunion de 'France à la carte' dimanche et à faire de nouvelles connaissances. L'exposé de Jolan était très intéressant et m'a permis d'apprendre plusieurs choses. Les crêpes et les galettes de Sylvain étaient excellentes et très bien garnies. Pierre et deux de ses amis nous ont interprété la chanson des Chevaliers de la Table Ronde, le tout dans une ambiance très conviviale. Un tout grand merci à tous pour votre accueil très chaleureux. Je garde un excellent souvenir de cet après-midi passé en votre compagnie.

奈良日仏協会の皆さん、ありがとうございました。フランス・アラカルトに参加して、楽しい時間を過ごすとともに、交友の輪を広げることが出来ました。ジョランさんの発表はとても興味深く、多くのことを学ぶことが出来ました。素晴らしいクレープとガレット、レニエさんと二人の仲間による「円卓の騎士」の歌、会場の誰もが打ち解けた雰囲気の中で過ごしていました。皆さんにとっても暖かく迎えていただいたことに、とても感謝しています。この午後に皆さんと過ごせたことは、素晴らしい思い出になりました。(Bénédicte Maemoto ベネディクト前本)



第138回 フランス・アラカルト「宝塚歌劇とフランス」(3/8) 報告

◆◆◆「愛、それは甘く...」。阪急宝塚線の豊中で育った私には、熱烈なファンでなくても宝塚歌劇は身近な存在でした。同学年の中には、進学先の一つとして宝塚音楽学校を受験し入学した人もいたほどです。先月何年ぶりかで『ポーの一族』を見る機会があり、豪華な衣装とスピーディーな展開、宝塚音楽学校で鍛えられた歌と踊りに魅了され、日常生活から隔離されたピュアな夢のような世界に浸ることができました。

そのような感動冷めやらぬうちに、フランス・アラカルトで宝塚歌劇を取り上げると知り、楽しみに参加しました。薮下先生のお話で、小林一三が創設した劇団の歴史を時系列でたどり、「ベルサイユのばら」が宝塚史上最大の



「フィナーレ」の舞台写真 ©宝塚歌劇団

ヒット作であることを知りました。詳しいストーリーは覚えていないのに、アンドレ編の主題歌である「愛あればこそ」を聞くとすぐに「ベルサイユのばら」を連想することができます。その歌詞は、「愛、それは甘く（強く、切なく、はかなく、尊く...）」と一言では表せない複雑な感情であり、女性が好きな、はまりやすい要素をすべて持っています。さらに、フランスという1970年代半ばでは憧れの国のお話であったことが最大のヒットにつながったのかもしれませんが、その後、フランス革命前後の作品が宝塚で上演されるようになったのは、この当時の衣装がいっぱいあるので、それを活用するためだというクッスと笑えるような経営サイドの舞台裏を知り、現実をかみしめながら帰宅した次第です。（蘭田章恵）

◆◆◆はじめて観た宝塚歌劇は、寿美花代さん主演の「華麗なる千拍子」でした。薮下先生のプリントにも書かれていたように、高木史朗氏の演出、1960年度の芸術祭文部大臣賞を獲得した作品です。初鑑賞でそんなエポック・メイキングな名舞台に出くわしたのですから、私は全く幸運でした。寿美花代さんは抜群に格好いい男役でしたが、妖艶な網タイツ姿にもなって話題を呼びました。主題歌の「幸せを売る男」(Le Marchand de Bonheur)は大変ヒットし、その後多くのシャンソン歌手が歌っています。あれから半世紀以上たち、近鉄沿線に住む私は、宝塚を見に行く機会はそんなにありません。それでも友人のお誘いなどがあると心躍らせて出かけていきます。トップスターたちが、大きな羽根飾りを背中につけてゆらゆらさせながら大階段を下りてくるフィナーレ、よく整ったラインダンス、鍛えられ訓練された舞台人の技を文句なしに楽しめるのが宝塚だと思います。昔も今も、映画、テレビ、商業演劇の世界で活躍している女優さんの多くは、宝塚出身であることを見ても、宝塚歌劇は「少女歌劇」という言葉のイメージをはるかに超えたプロの集団による素晴らしい舞台芸術であると思います。（長谷川明子）

◆◆◆宝塚歌劇の舞台はいまだに見たことがなく、アラカルトで紹介された大掛かりな「虚構」、そして元気で美しい少女たちの作る世界が、夢みたいでした。大正から昭和初期の時代に、フランスの「レビュー」（この語のほとんどの意味はrevue「再び見る」とのこと）を取り入れて宝塚独自のスタイルを作りあげたのは、当時の日仏文化交流、日本におけるフランスの影響、逆ジャポニズムのような現象とっていいのでしょうか。この流れが少し分かって興味をもちました。「ベルサイユのばら」でオスカル演じた榛名由梨が、演出家から「瞳から星を飛ばすように」と言われ、困惑しながらも真剣に受け止めて演じようとした話には、心打たれるものがありました。しかも、それを指導したのが女を眼で殺す長谷川一夫だったとは...！ 生きている間に「ベルばら」上演を観に行く機会があったら、一階の「いの26」席にすわることにしましょう。オスカルに見つめてもらえるかもしれない...と期待しつつ。（泉悦子）



講演を終えて

薮下 哲司（やぶした てつじ）

宝塚歌劇とフランスの親密な関係。長年、宝塚歌劇の取材に携わってきましたが、当たり前のこととしてあまり深く考えたことがなかったのですが、講演の依頼を受けてからその関わりを改めて調べてみると、多くの新たな発見がありました。講演では、宝塚歌劇の発祥、「レビュー」の移入からフランスと関わりを持ち今に至っていること、決定的となったのが「ベルサイユのばら」であることなどをお話ししました。肝心の「ベルばら」の名場面を見て頂く場面で映像がフリーズしてしまいなんとも残念でしたが、それは実際に生の舞台を見て頂くという事でご勘弁ください。宝塚歌劇には詳しくなくても、宝塚歌劇で上演したフランス文芸作品については専門の方ばかりで、打てば響くそんな雰囲気は私にとってとても刺激的な時間でした。

第46回奈良日仏協会「シネクラブ」例会(2/25) 報告

◆◆◆学生の頃、やくざ映画とマカロニ・ウェスタンにはまり、フランスのフィルム・ノワールも何本か見ましたが、この映画は見てませんでした。護送中に列車から逃走した男が、刑務所から出所してきたばかりの男（アラン・ドロン）の車のトランクに隠れるという偶然の出会いを契機にして、二人に絆が生まれ、警官あがりの射撃の名手（イヴ・モンタン）も加わり三人で宝石店強盗を謀り成功しますが、売りさばこうとして警部の策略にはまり全員殺されるという話です。追う警部と射撃の名手が警察の同期だとか、いろんな人間の運命的なつながりが物語の軸にあります。女性陣の感想はモンタン派とドロン派に分かれましたが、描かれているのは男の美学。無言のまま、目配せ、煙草のやり取りなどで、意思を通わせるやり方や、トレンチコートを着て煙草をくわえた姿はとてまかつこいい。若い頃、気弱でお喋りな自分を忘れ、サングラスをかけて煙草をふかしてみたりしたことを思い出しました。この時代、イタリアでもマカロニ・ウェスタンが登場するなど、日本のやくざ映画がヨーロッパに影響を与えていて、映画の世界でもジャポニズムがあったと言えるのではないのでしょうか。（杉谷健治）

◆◆◆『仁義』は1970年の映画ですが、そのころフランスに居たので、パリの街並み、地方の景色など画面が懐かしい景色でいっぱいでした。アラン・ドロンは映画、コマーシャルでお馴染みの俳優ですが、今回の作品では最後の結末がよく分からず、観客に考えさせようとする意図があったのかなあ...とは思いますが、最後に「メダタシメダタシ」がないのは少し不満でした。（坂本成彦）

◆◆◆宝石泥棒の目だし帽姿になっても、美しい目のクローズアップだけで、アラン・ドロンだとすぐに分かる。だが、今回はスターであるドロンは脇に回り、イヴ・モンタンや、逃亡犯役のジャン・マリア・ヴォロンテに華を持たせていた感があつた。特に『荒野の用心棒』などマカロニ・ウェスタンで悪役を演じていたヴォロンテが、同じ役者だと思えないほど違った風貌で、最後に仲間に義理立てする役回りを演じていたのが印象的だった。（長谷川明子）



◆◆◆暗くて狭い寝台車から脱出して、広い野原を逃げてゆく犯人を、一挙に見渡す風景の俯瞰映像。彼を捕えようとして軍隊の歩兵のようなもの凄数警察官たちが、野原を整然と隊列をなして進んでいく映像は、絵画のような見事さがありました。対照的に、射撃の名手ジャンセン（イヴ・モンタン）が、強盗に入る宝石店の最新セキュリティシステムを封じるために、弾道まで計算した弾丸を自ら調合して作る場面、理科の実験室のような、小さな事物をクローズアップさせる細密な映像が、とても印象的でした。（浅井直子）

◆◆◆オオカミのような警察犬が迫ってくる、アル中の幻覚でヘビやネズミに襲われる、泥だらけの林、暗い隠れ家・・・自分の中に眠っている悪とかスリルとかへの願望のようなものが刺激される。容疑者に逃げられた警部は汚いやり方で《赤い円》で結ばれた3人を毘にかける。こちら悪。しかし警部役のブルヴィルは素晴らしかった。冷酷だが仕事上の悪を痛いほど自覚している。このはまり役の俳優が人気コメディアンだったとはとても想像がつかない。冷気や湿った匂いも伝わるような全編寒色で描かれた映像が美しかった。（大内隆一）

河瀬直美監督の新作映画『Vision』：昨秋、奈良県吉野町でロケ、6月8日から全国ロードショー

2017年の9月3日～20日と11月10日～12月3日の2度にわたって、奈良県吉野町でこの映画の撮影が行われました。主演のジュリエット・ビノシュさんと永瀬正敏さんは、役の人物になりきってほしいという監督の意向から、ロケ中も吉野町で生活されていたそうです。ビノシュさんが滞在していたのは、「国栖奏」の伝統行事で知られる南国栖地区にある宿坊の清谷寺。土地での生活に自然になじまっていたそうです。撮影がお休みの日には、地元の手漉き和紙工房やしょう油の醸造元を見学して、帰国時にはその和紙やしょう油をたくさん買って行かれたとか…。ビノシュさんは映画の公開に合わせて、初日6月8日に、はるばるフランスから近鉄京都線高の原駅近くのイオンシネマにまで足を運んで舞台挨拶をされ、そこで吉野の森での生活の素晴らしさを口にされました。これからは奈良ゆかりの女優さん、*Nos amis francophones à Nara* の一人と考えてもいいのでは…、などと勝手な想像をした次第です。映画では、吉野の山の樹林が自然そのままというよりも、少し人工的な処理が施されてより芸術性の高い映像になっているという印象を持ちました。映画もとても美しいですが、私たちは奈良に住んでいますので、映画を鑑賞するだけでなく、四季折々いつでも気の向いた時に、吉野の山々や川のそばに行き、美味しい水や空気を吸いに行けたらと思います。この土地での暮らしを気に入ったビノシュさんのことを想い浮かべつつ…。（浅井直子）



奈良日仏協会「美術クラブ」発足記念：「ゴッホ展」鑑賞会（3/2）報告

奈良日仏協会「美術クラブ」発足を記念して、3月2日午後2時から京都国立近代美術館で「ゴッホ展」鑑賞会を実施。参加者は17名（内会員9名）。当日は快晴の上、展覧会の最終週の金曜日に当たり会場は正倉院展並みの混雑。各人が事前にチケットを入手し、早めに集合するなど超人気展へ好対応。参加者確認後に美術館エントランスに集まり展覧会概要を説明。「ゴッホの人となり」「時代背景」「ジャポニスムとは何か」をチェックポイントとして、今日は美術評論家になったつもりで「展覧会を採点する」という目標を掲げた。そして超混雑会場での鑑賞法を確認「並ぶよりも隙間を目掛けて滑り込む」「解説より作品を見る」「とにかく近くで角度を変えながら」等々…。

いささか過激な鑑賞法だが、吉良邸に乗り込むごとく気合に満ちた形相で各人が展示会場へ。当日の鑑賞はまさに格闘！？だったのでは。

約1時間半後に近くのカフェに全員が無事に集合。ゆったりとした美術鑑賞とは程遠い疲労感に襲われながらも、参加者たちの充実した顔を拝して一安心。その後の歓談はアルコールなども入り、和気あいあいに各人が感想や自己採点を披露。文学、音楽などの専門家たちの興味深い話もうかがうことができ、あつという間の楽しい1時間。カフェタイムの意見交換会も最良の「S」評価だった。

ゴッホの絵画は見ていて飽きない。それは色彩の美しさであり、激しい筆使いであり、人間の深層まで描き出す眼力の鋭さであり…。その絵画の力が鑑賞者を魅了する。彼の悲劇的な人生と対極に生まれた生命力がそこにあるからだ。日本へ憧れ、画家の共同体を夢見てアルルに住んだゴッホ。厳しい現実には叩かれながら、自分の理想をかたくなに信じ、追い求めた姿があまりにも痛々しい。だが命と引き換えに生み出された絵画は生の輝きに満ちている。それは深い悲しみや怒りを越えたところにある希望、そして勇気を教えてくれるかのようだ。

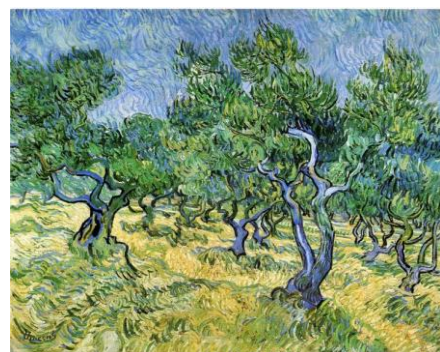
日仏交流160年の記念の年に立ち上げた美術クラブだが、「ゴッホ展」鑑賞会は、活動の序章としてふさわしい内容であったと思う。今年は「ジャポニスム」関連展が目白押し。今後の美術クラブの活動にこうご期待！（南城守）



「画家としての自画像」
(1887/88年、『ゴッホ展図録』より)

◆◆◆ゴッホ展鑑賞をきっかけに、友人と弟テオに宛てられた「ゴッホの手紙」を読んでみた。ほとんどがまずお金の無心から始まっている。それも明日のパンが買えないといったレベル。当然、画材にも事欠く極貧生活。一方で創作への意欲は強く、テオにその情熱を熱く語っている。画家仲間への友愛の精神から、南仏での共同生活を画策した。しかし、実際には人間関係がスムーズに行かず、特にゴーギャンとの破綻はゴッホを苦しめた。更に、絵も売れず、この理想と現実のギャップが彼の心身を蝕んだようである。猟奇的事件を起こし精神病患者とレッテルを貼られ、自由に絵を描かせてもらえなくなった。それでも、この孤高の天才画家は益々創作への想いを募らせていくのであった。芸術は生身の人間の営みだから、畢竟、俗世の宿命は免れ得ない。運命に抗うかのような創作魂に真の芸術家の凄まじさを見た気がした。そういうゴッホの純粋な魂が、それ故に、現代人の心を捉えて途轍もなく高い評価を得るに至っている。なんと皮肉なことか！！（藤村久美子）

◆◆◆展示を見る前、「解説文ばかり読まずに、にじり寄って絵そのものをしっかりと見ることが大切」という南城さんの檄を受けて、黒山の人だかりをかき分け隙間に潜り込みながら鑑賞しました。「オリーブ園」のように、長太い点を細かく積み重ね、木々がよじれ下草が波打っているように見える絵と、浮世絵の影響と思われる大柄な枠組みの平面的な絵が同時期に混在しているというのが不思議な印象でした。ジャポニスムというのは頭では分かっていたつもりでしたが、実際に当時の雑誌の日本特集号やパリ浮世絵展で紹介されている様子を見ると、当時のフランスに与えた浮世絵のインパクトがいかに大きかったか肌身で感じることができました。ゴッホがアルルを日本と思い込むほど日本に憧れ、そのゴッホを神のように崇拝して日本画家が墓に詣でるといふ日仏の交流し合う姿に感銘を受けました。奈良日仏協会美術クラブ「序章」にふさわしい好企画だったと思います。（杉谷健治）



「オリーブ園」
(1889年、『ゴッホ展図録』より)

第1回美術クラブ鑑賞会のお知らせ：「プーシキン美術館展～旅するフランス風景画」

国立国際美術館（大阪・中之島）にてロシアのプーシキン美術館の珠玉のコレクションから、フランス風景画65点を展観。注目は印象派誕生の兆しがうかがえる名作、モネの「草上の昼食」。まず「鑑賞のツボ」を押さえ、それから「鑑賞」、さらには鑑賞後の「カフェタイム」での会員の専門分野の垣根を越えた楽しい感想会にも、こうご期待。風景画誕生の軌跡やジャポニスムを振り返り、フランス美術を堪能しましょう！（南城守）

※9月開催予定、詳細は8月上旬発行「Mon Nara 通信」に掲載します。

「フランス語会話講座」開講

杉谷 健治

今年度から新しく奈良日仏協会主催の語学講座を設けました。奈良県内でフランス語を習いたいと思ってもなかなか場がない現状を踏まえ、当協会の活動目的である日仏文化交流を促進するために少しでも力になればというのが趣旨です。その第一弾として、4月26日にフランス語会話講座がスタートしました。講師はガイドクラブでもおなじみのピエール・レニエ先生。先生の「和気あいあいとした雰囲気の中で楽しみながら、皆さんが正しく喋られるようにお手伝いします」という呼びかけに応じて、8人の生徒が集まりました。

あらかじめ先生からテーマが出され、それに基づいて話すというやり方で、4月の1回目は、フランス語での自己紹介の後、フランス旅行の思い出や、フランスで行ってみたい場所について、発表しました。カマルグの湿地帯やロワールのソーミュールのワイン畑の思い出を語る人もいれば、フランスへはまだ行ったことがないけどゴシック教会のステンドグラスが見たいと詩的な表現で語る人、タクシーに乗ったら犬が乗っていてびっくりした話、スマホを取られた失敗談など。訥々とはありますが、皆さん熱心に語られ、あっという間に予定の時間が超過してしまいました。

5月の2回目は、フランス人と日本人の違いを語るというテーマで、生まれてすぐ親と離れて寝るフランスと小学生半ばになるまで親と一緒に部屋で寝る日本、伝統的で同じ名前の多いフランスと奇抜で多様な名前の日本、知らない人にニコリ微笑むフランス人と知らんぷりする日本人、逆にレストランで喧嘩をしている人たちのそばで何事もないかのように振舞うフランス人など、いろんな話題が。あらかじめ準備しているとはいえ、頭に入っていないので、すらすらと言葉が出てこず、ついノートを見てしまいます。男性形・女性形や現在・過去の違いなど、おかしい表現があれば先生がその都度間違いを訂正し、それを分かりやすく白板に書いてくださいます。

「フランス文化が好きという方ばかりの中で共に学べる喜びを感じました」、「フランス語に触れる時間として貴重」、「レニエ先生の話すスピードがゆっくりなので聞きやすい」というように、皆さんから概ね好意的な感想が寄せられました。先生からは、「スピーチではなく会話の講座だから、みんなで自由に話し合えるようになるのが今後の課題、少しずつ慣れて行きましょう」との言葉。本講座は定員がいっぱいとなってしまいましたが、各務奈緒子先生の「フランス語初級講座」(金曜午前開講、その他の日時は相談に応じます)はまだ受け付けておりますのでご興味のある方は当協会事務局までお問い合わせください。



フランスの郷土料理 (4) ロワールの「クレム・ダンジュ」(Crème d'Ange)

「フランスの庭」と喩えられるほど、温和な気候と豊かな農産物に恵まれたロワール地方。王侯貴族たちがこぞってこの地方に居を構えたのも、そんな豊かな食材から生まれる美食と、美味なるワインに魅せられたからかもしれません。大西洋へと注ぐロワール川では、ウナギ、川ニシン、スズキ、カワカマス、サケなどの川魚が獲れ、これらはレストランの定番メニューになっています。また10月1日から2月まで続く狩猟シーズンに味わえる野鳥獣料理(ジビエ)も絶品で、鴨、野ウサギ、イノシシ、キジ、シカ、ウズラなどが食卓に上ります。実り豊かな秋は、ルイ14世の好物でもあったキノコの収穫期。最も適した栽培場所とされるソーミュールはキノコの名産地として有名です。チーズの種類も多く、山羊のチーズ、シェブルも豊富です。マイルドなものからピリッと刺激的なもの、クリーミーなものと同じく様々あり、ロワール産のワインとよくあいます。

今回は、私の大好きなフレッシュタイプのチーズ「フロマージュブラン」を使用したアンジュ地区の伝統菓子「クレム・ダンジュ」をご紹介します。作り方は以下の材料を上から順番に混ぜてガーゼで包んでぶらさげて一晩水けを切るだけです！

(材料) フロマージュブラン 又は クリームチーズ 100g

生クリーム 150ml

レモン汁 大さじ1

砂糖 40g

卵白 1個分(メレンゲにする)

簡単でしょ？そのまま食べても美味しいですが、甘酸っぱいラズベリーソースやブルーベリーソースをかけて食べるのが本場の食べ方です。とことん爽やかで優しさ溢れるデザートです。これには、ロゼダンジュ(ロワールを代表するロゼワイン)がぴったりです！口の中に天使(アンジュ)が舞い降りますよ！！(笑) それではみなさま Réjouissez-vous de la prochaine fois ! (法人会員 北田浩久)



2018 年度 ガイドクラブの案内

今年度のガイドクラブ散策は、10月13日(土)に奈良県吉野町の吉野川沿いの名所を訪ねます。行程は以下のとおりです。

- 11:00 近鉄大和上市駅集合、吉野川沿いの「妹山・背山遠景地点」まで徒歩(20~30分)、写真撮影
 12:00 「立野」バス停から、吉野町コミュニティバスに乗り、「宮滝」下車、吉野川渓流沿い櫻木神社方面散策
 13:00 「まつや食堂」お座敷にて昼食 14:00 吉野離宮跡の「梅谷醸造元」(宮滝しょうゆ)見学
 14:45 マイクロバスにて窪垣内へ向かう 15:15 「福西和紙本舗」工房見学
 16:37 吉野町コミュニティバスに乗り 17:05 大和上市駅到着、解散(その後は、有志で飲み会)

- ◆当日はピエール・レニエさんが参加、日仏交流の場として他のフランコフォンの方にも参加を呼びかける予定です。
 ◆参加費:会員 2000 円 一般 2500 円 (定員 15 名、昼食代・バス料金込み、要予約)
 ◆申込先:Nasai206@gmail.com 浅井直子

【妹山・背山】江戸時代、近松半二らの合作『妹背山婦女庭訓』(いもせやまおんなていきん)は浄瑠璃や歌舞伎で上演され、吉野川をへだてた妹山と背山を背景にした敵同士の家の男女の悲恋物語は、舞台演出の見事さもあって、今なお人気演目となっています。「妹山」「吉野川」「背山」の3つを一望できる地点を訪れます。

【宮滝】吉野というと今日では「花の吉野山」を思い浮かべる人がほとんどですが、万葉時代は、「桜」の吉野山は一首も詠まれておらず、大半は吉野川流域の土地に関係し、「山の吉野」よりも「川の吉野」が中心でした。雄略・斉明・天武・持統・文武・元正・聖武にいたるまで、明日香、藤原、平城の都からたびたび天皇が行幸し、中でも持統天皇は在位 11 年の間に 31 回も訪れ、吉野に特別な思い入れがあったようです。柿本人麻呂、山部赤人、大伴旅人ら、時の天皇にお供した宮廷歌人たちも、吉野で歌を詠んでいます。その一部を、ルネ・シフェール (René Siefert) さんの仏訳 *Man.yôshû* とともに、以下に紹介しましょう。

山川も 依りて仕ふる 神ながら たぎつ河内に 舟出せずかも 柿本人麻呂 巻 1-39
 み吉野の 象山のまの 木末には こどもも騒ぐ 鳥の声かも 山部赤人 巻 6-924
 昔見し 象の小川を 今見れば いよよ清けく なりにけるかも 大伴旅人 巻 3-316

La Souveraine divine
que viennent servir ainsi
les monts et rivière
dans le val aux eaux rapides
elle fait sortir sa barque
(Kakinomoto no Hitomaro)

De Yoshino
au val de Kisayama
dans la ramure
ah le chant des mille oiseaux
qui mènent si grand tapage
(Yamabé no Akahito)

Jadis j'avais vu
le ruisseau de Kisa
or à cette heure
je le vois plus que jamais
pur et limpide devenu
(Ôtomo no Tabito)

万葉から 1250 有余年の後、谷崎潤一郎は小説『吉野葛』(1931) で宮滝の岩の上に腰をおろして語り合う二人の青年を通じて、私達読者に母恋の身上話を聞かせてくれます。万葉の歌人から昭和の作家に至るまで、人は山深い吉野の渓流のほとりに来ると、何かしら心の奥底にある情動が呼び覚まされるのでしょうか? 現地を訪ねて、歌や小説の言葉の背後に流れる吉野川のせせらぎが聴きとれるようになれば、心はすでに「よき人のよしとよく見てよしと言ひし」吉野の「よき人」! 当日は『万葉集』や『吉野葛』のフランス語テキスト抜粋その他の参考資料を用意します。

【吉野の手漉き和紙】 la papier fait-main de Yoshino

「吉野手漉き和紙は、大海人皇子が養蚕と共に和紙の製法を吉野の人々に教えたのが始まりと言われ、その伝統と技術は 1300 年以上吉野の地で守られてきました。吉野では明治初期ごろには約 200 軒が手漉き和紙を作っていたそうですが、和紙需要の減少により、今では手漉き和紙を作っているのは 6 軒だけです。」

« La légende veut que le *washi* ait été introduit dans la région de Nara avec la sériciculture par le prince Ômano, futur empereur Tenmu, il y a plus de 1300 ans, et que ces deux traditions aient été depuis lors protégées à Yoshino. Au début de l'ère Méiji (vers 1860-70), il y avait près de 200 papetiers à Yoshino, mais la baisse de la demande de *washi* a réduit ce nombre à 6. » (奈良県知事公室国際課発行「奈の良」第 7 号、フランス語版「Na no Ra」No7 より抜粋、フランス語訳は奈良県国際交流員ジャンヌ・オストリーさんによるものです)

※10月に工房見学を予定している福西和紙本舗の手漉き和紙は、文化財の修復紙としてその品質が高い評価を受けており、ボストン美術館、大英博物館、フランスのルーブル美術館やギメ美術館の方々も見学に来られるそうです。



写真は上から「妹山背山」「吉野川に象の小川が注ぐ(夢のわだ)遠景」「宮滝付近:岩場」「福西和紙本舗の冬の天日干し風景(2月)」

三重日仏協会 第18回「柏木隆雄文芸講演会」

4月9日(日)、津市において、三重日仏協会と放送大学三重学習センターの共催による文芸講演会が開催されました。講師は、大阪大学名誉教授の柏木隆雄さん。大手前大学学長、日本フランス語フランス文学会会長、放送大学大阪学習センター所長なども歴任されています。柏木さんの講演会は、もう18回目になりますが、今年の演題は「フランスはどのように中国を知ったか——バルザックの小説を手がかりにして」。

2014年、ちくま文庫から刊行された柏木隆雄訳のバルザック『ソーの舞踏会』に収められた短編小説『禁治産』を取り上げ、登場人物のひとりで中国文化に心酔するデスパール侯爵を手がかりに、どのようにバルザックが中国を作中に取り入れているかが紹介されました。バルザック研究に新しい視点をもたらすフランス語で書かれた学術論文をもとにした発表でしたが、語り口調はいつもの柏木節で、楽しい講演会となりました。

17時からは、津駅前のBistrot de Fleurで、三重日仏協会主催の懇親会が開催されました。例年のように、親密で快適な時間を過ごしたあと、別れ際には1年後の再会を約しました。(三野博司)



奈良市美術館再オープン記念展：「奈良とベルサイユ」

奈良市美術館再オープンを記念して、「奈良とベルサイユ～悠久の美を求めて～」が開催され、4月24日(火)14時からのオープン・セレモニーに南城守理事とともに出席し、「奈良百景展」を鑑賞しました。20年前に奈良市制100周年を記念して製作された100点の風景画です。これまでに何度か公開されたようですが、私は初めて目にしました。奈良各地の情景が、それぞれの画家の異なる手法で描かれ、一つひとつ眺めて興味が尽きません。南城さんも2点描いています。「唐招提寺の校倉造経蔵・宝蔵」と「東大寺戒壇院」。とりわけ東大寺戒壇院は、画面の半分以上を石段が占め、花卉が散る桜の季節ではなく冬を描いて、堂内に鎮座する四天王像の峻厳を石の階段によって暗示するような表現の深さが印象的です。



5月7日から記念展は後半に入り、ベルサイユ在住の大石良太画伯による「ベルサイユ百景」に引き継がれました。私は最終日の5月27日に訪れ、大石画伯とも再会してことばを交わす機会がありました。この百景からは、かの有名なベルサイユの宮殿ではなく、人々の生活が匂う町のたたずまいを描いて、時の流れとともに変化し、あるいは消えゆくその姿を画面のなかに留めようとする画家の使命感が伝わってきます。(三野博司)

パリ日本文化会館講演会：「アルベール・カミュ、アルジェリア……そして日本」

エッフェル塔にほど近いMaison de la Culture du Japon à Paris(パリ日本文化会館)において、3月28日-6月2日の期間、ロンドン在住の日本人写真家である米田知子氏による写真展「Le Dialogue avec Albert Camus アルベール・カミュとの対話」が開かれ、その一環として5月22日には、18時から19時半まで、同館において講演会「Albert Camus, Algérie...et Japon アルベール・カミュ、アルジェリア……そして日本」が開催されました。講演者は、国際カミュ学会会長のアニェス・スピケル氏、および同副会長の三野博司でした。

予約の段階で120名の会場は満席となり、申し込みを断るほどで、パリ市民の文化意識の高さ、カミュに対する関心の深さと広さがうかがわれました。スピケル氏による「カミュとアルジェリア」、三野による「カミュと日本」と、二つの異なった講演を並べて、カミュの世界の広がりを知ってもらう良い機会となりました。

米田知子氏、および美術評論家でキュレーター岡部あおみ氏は、次回は日本での写真展開催を構想しているとのことで、企画の段階から協力してきた三野としては、その実現に期待したいと思います。(三野博司)



「徒然フランス音楽メモ」(2)《木管楽器 クラリネット》

大内 隆一

「明鏡国語辞典」のクラリネットの項目には《木管楽器の一つ。一枚のリードをつけた縦笛型の楽器で、広い音域と豊かな音色をもつ》とあります。簡にして要。辞書によっては《木製または金属製の…》など書いてあります。金属製のクラリネットなんてアラビアかどこかの博物館でしか見られないでしょう。国語辞典を選ぶときは、あとで腹が立たないように自分の好きなものをどう解説しているか吟味して決めないといけません。

比較的新しい楽器で、交響曲の父ハイドンは第 99 番以降で、モーツァルトは師よりも先に第 31 番「パリ」で初めてクラリネットを採用しています。その広い音域(約 3 オクターヴ半)と豊かな音色でベートーヴェン以降の交響曲、管弦楽曲ではもう欠かせない楽器になりました。

さてこのクラリネットにはドイツ管とその改良型のフランス管という二つのシステムがあるのです。管の内径や構造、キーメカニズムも運指も異なり(写真)、何よりも音が違うので伝統を重んじるオーケストラなどでは互いに他を受け入れられないようです。来日オーケストラではまずクラリネットに目が行き《旧東ドイツなのでやっぱりドイツ管だ》などと納得してしまいます。

最初に魅かれたのがウィーンのレオポルト・ウラッハの演奏するモーツァルト、ブラームスで、今でも「懐旧的な憧憬」などと評される深い音色が特徴です。一方フランス系で人気の名手はジャック・ランスロでした。明るい水彩のような音色でヴィブラートまでかける。ランスロのブラームスはどうも頂けないが、ジャン・フランセのクラリネット協奏曲を聴いてその洒落た色彩に溢れる音楽そのままの華やかな音色と技巧に圧倒されました。そしてサン＝サーンス、ドビュッシー、プーランクなどの別世界のクラリネット曲があることを知りました。この跳躍する表現力は新大陸におよんでトランペットと共にジャズの花形楽器としても活躍し、音楽の可能性をさらに拡大しました。

フランス管
(ベーム式)ドイツ管
(エーラー式)

会員投稿

ボース平野の草花「ワスレナグサ」

浅井 直子

ボース平野はフランスを代表する穀倉地帯。大聖堂で知られるシャルトルを中心に、麦畑が一面に広がっています。シャルル・ペギーが百年前に詩の中で《l'océan des blés》と、麦畑を大海に喩えた風景は今も変わりません。シャルトルの南西 25 キロにあるイリエ・コンブレ（マルセル・ブルーストの父親の故郷で、ブルーストが少年時代、復活祭の休暇を過ごした町）への列車は、どこまでも続くかのような麦畑と菜の花畑の中を走り、車窓には遠くや近くに見える集落が現われては消えていきます。

5 月初め、イリエ・コンブレ周辺の集落を自転車で行くつも巡りました。サンテマン、メレグリーズ、ヴェーヴィック、タンソンヴィル、モンジュヴァン、ルーサンヴィルなど、小説に登場する地名に近い名前の土地にさしかかると、その名が記された標識を見ただけで胸が高鳴ります。ボース平野の道はどこまでも平坦で、5、6 キロの道のりも自転車ならあっという間です。麦畑の間を縦横に走る大小様々の道をゆっくりペダルをこいでいると、サンザシ、リンゴ、リラなど樹木に咲く花だけでなく、道端のいたるところに生えている小さな草花が目に入り、好きなところで自転車を止めて、それらの花々をじっくり眺めることができました。キンポウゲのつややかな黄色の小花は宝石のように輝き、ヒナゲシの赤は吸い込まれるようなあでやかさです。青色の花はたくさんありますが、ヤグルマギクとツルニチニチソウは花の形が特徴的ですすぐにわかります。

今回もっとも印象深かったのは「ワスレナグサ」。小説の中に何度か出てくるのですが、花言葉、本の表紙の装幀、ドレスの花模様などの印象が強くて、これまで現実の花としては思い描いていませんでした。上品な水色の花びらが、中心部の白色や黄色のボタンでパッチリと留められているようで、野道にたくさんの小花が浮かび上がるように咲いていました。はじめはそれがワスレナグサとはわからなかったのですが、12 世紀に製作されたシャルトル大聖堂のステンドグラスの中に図像化されて散りばめられているのを見て、「これがワスレナグサだったのか…」と気づいた時の新鮮な驚き！ 「自然」「人々の労働・生」「芸術」が、長い時間のなかで互いに影響し合って、この土地の風土が作られてきたことを思い、何ともいえない感慨がありました。



ムギ

ワスレナグサ

キンポウゲ

ヤグルマギク

ヒナゲシ

ツルニチニチソウ

会員紹介

「パリのおうちごはん」事情

柳谷 安以子（やなぎたに あいこ）

奈良市西登美ヶ丘で「フランス地方菓子・地方料理・パリのおうちごはん」の小さな教室を主宰しています。今日はその中で感じた今のパリの食事情に視点を当ててみたいと思います。

日本と同じでパリの主婦（夫）たちも忙しく、日々簡単で美味しい！を目指して奮闘しています。でも、毎日、どんな料理が食卓に並ぶのでしょうか。私の「パリのおうちごはん」クラスでは毎月定期購入している料理雑誌からレシピを選びます。

まずアントレ、そしてメイン（プラ）とデザート の3種類です。デザートは家庭でも無くてはならないものらしいですね。その料理にオススめのチーズやワインを載せてあるのもフランスらしいです。レッスンのメニューを選ぶ際にはその食材が日本のスーパーにもあることが条件です。私達には日常的でないメニュー（例えばウサギなど）は除きます。また、盛り付け・料理方法や食材の合わせ方など、ちょっとしたパリのセンスを取り入れることもポイントです。（例えば塩辛いペコリーノ・ロマーノなどのチーズを塩がわりにスープにトッピングするなど。）同じ北半球で共通する旬の食材も多いので、やはり季節感を大切にしているのを感じます。

フレンチレストランでは出てこない家庭料理。今、現地でもその雑誌を見ながら作った料理が食卓に並んでいるかも！ そんないたずらっぽいコンセプトで楽しく作っています。機会あれば、皆さまとフランスの食、伝統菓子、地方料理、ワイン、チーズ等のテーマでランチ会など出来ればいいな、と思っています。



えんどう豆のスープ
ブルビ（羊乳）チーズ添え

50年ぶりのフランス語との再会

小林 一子（こばやし かずこ）

今年の一月からご縁がありまして、奈良日仏協会に入会させて頂きました。約50年程前に関西日仏学館大阪文化センターで、フランス語の初級を途切れ途切れに学んだだけの私ですが、昨年5月に三野先生の「美女と野獣」の講座にお誘いいただき、50年間殆ど接することの無かった懐かしいフランス語に再び出会い、



まるで昨日習ったかのように当時習った会話を自分が覚えていることに驚きました。またその時の先生のお話の楽しかったこと！

1972年私が関西日仏学館に通っていた最後の年、当時習っていたクロード・V・クラヴリ先生（その後アルゼンチンの方に行かれたと聞きました）のクラスの10人位が先生のお宅に集まって、皆で料理を作って先生にご馳走したことを思い出しました。（左写真）

音楽が好きで6年程前から声楽を習っていますので、11月に宇陀市のハワイエヴェールで行われました「詩と音楽のマリアージュ」には早速参加申し込み致しました。藤村久美子さんの洗練されたピアノ！ 三野先生の楽しい解説！ 水谷先生の美しいフランス語の歌！ 奈良にこんなにも素晴らしい会があり、参加させて頂けたことに感謝あるのみです。

今年3月には京都国立近代美術館で開催されていました「ゴッホ展」での美術クラブにも参加致しました。南城守さんのご説明で事前に「鑑賞のツボ」を押さえておくことも習い、また鑑賞後もカフェタイムで様々なお話を伺い、とても充実した1日でした。単独で鑑賞するよりも何倍も深く理解することができました。

平凡な主婦の私ですが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

フランスの好きなものあれこれ

知念 宏司 (ちねん こうじ)

この春入会させて頂きました。専門は数学で、大学教員をしております。フランス語を初めて勉強したのは大学1年生の時、NHK ラジオのフランス語講座を聞いたのが最初でした。その後少し離れていましたが、近代フランス音楽に興味を持ち、ワインとチーズに出会うにあたり勉強を再開、3度のフランス旅行の後、ついに2016年度、在外研究の機会を頂き、1年間ストラスブールに滞在しました。

フランスに住居を構えて生活するというのは、どちらかというとフランスの「よい面」ばかりを見る短期の旅行とは違って、困ったこと、大変なことも数々あり、驚き、戸惑いの連続という面もありましたが、そうしたことのすべてがフランス文化の習得ということで、逆に興味深く対処しておりました。全体としては、研究にも集中でき、多くの人たち(日本人、フランス人)とのすばらしい出会いもあり、大変充実した、非常に楽しい1年間でした。現地で知り合ったフランス人とは、現在も時折メールや手紙のやり取りを続けており、今後もこうした縁を大切に、交流を続けたいと思います。

フランスの文化で興味のあるものは、まず音楽です。主に19～20世紀のフォーレ、ドビュッシー、ラヴェル、ケックランあたりが好きですが、古楽にも興味があります。ノートルダム楽派、アルス・ノヴァ等の音楽は、現代人にとってある種「別世界」で、逆に新鮮に聞こえ、大変興味深いと思います。これらの時代においては、フランスが西洋音楽の中心であったわけですし、バロック後期のラモーによる機能と和声の発見も、フランス音楽の重要な貢献だと思います。

他にフランスの好きなものは料理、ワイン、チーズでしょうか。レストランにも通いましたが、長期滞在中のおかげで、現地の食材を使って自分で料理を作る経験ができ、食材の豊かさをあらためて実感しました。さらに、知り合った方々のご縁で、数回ですがプロの料理人に料理を習う機会にも恵まれ、「昼は数学の研究、夜は料理の研究」という日々を送っておりました。私のような者が作ってもそれなりの仕上がりにはなり、料理はその土地の食材に根ざしたものであることを実感しました。帰国後もこの経験をもとに、家庭料理、郷土料理の類いを引き続き研究しております。

文学では、「文学作品に登場するワインとチーズ」という観点で、今後いろいろと読んでいきたいと考えております。また鉄道ファンで、フランスの鉄道には、日本よりおもしろいものがいろいろと残っていると思っています(例えば機関車が客車を牽くタイプの列車がまだ多いことなど)。最近では勉強の一環として、日本漫画のフランス語訳なども読んでおります。その他、フランス語やフランス文化について、個人的体験やおもしろいと思ったことなど、発信できる機会があればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



ストラスブール大聖堂前にて

フランスでの生活をきっかけに

知念 夕紀子 (ちねん ゆきこ)

このたび、家族会員として入会させて頂きました。2016年より1年間、主人の仕事でストラスブールに滞在しました。フランス語はゼロからのスタートでしたが、日々の生活の中でたくさんのフランス語を浴びることができ、充実した時間を過ごせました。そして生活できたことで、



コルマルにて

フランスという国の魅力に日々感動し、フランス人の生活から多くのことを学ばせてもらい、人生で大変貴重な経験をすることができました。

専門はピアノで、特にショパンが好きです。滞在中、ジョルジュ・サンドの館があるノアンへ行くこともでき、多くのインスピレーションを受けました。中期以降の主な作品はほぼノアンで作られたということで、この地があつてこそ数々の傑作が生まれたことを実感し、あらためて感慨深く思いました。これから少しずつ、フランス滞在のことなど、会員の皆様とお話しできる機会があれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

第140回 フランス・アラカルト「17・18世紀のフランス・オペラ紹介」(7/21) 案内

❖ 日時：2018年7月21日(土) 15:00～17:00 ❖ 会費：会員500円、一般1000円

❖ 会場：生駒セイセイビル 205 会議室 (近鉄生駒駅南へ徒歩2分)

※ 奈良市西部公民館に変更の可能性あり、その場合は参加申込者に連絡。

❖ 問い合わせと申込先：Nasai206@gmail.com tel: 090-8538-2300 (浅井)

❖ 講師：内藤義博 (ないとう よしひろ) さん

(講師紹介) 関西大学非常勤講師。主な研究分野は、18世紀フランス文学、音楽美学。主要著書『ルソーの音楽思想』(駿河台出版社、2002年)、『ルソーとフランス・オペラ』(ブイツーソリューション、2013年)、『フランス・オペラの美学』(水声社、2017年)。奈良日仏協会元会員、Mon Nara 編集責任者・事務局次長等を歴任。

❖ 講師からのメッセージ：ワグナー、モーツァルト、ヴェルディといった、オペラファンによく知られた作曲家たちの作品とはひと味違った17・18世紀のフランス・オペラを、リュリやラモーを中心に、紹介します。(右図版はアポロンに扮したルイ14世)



第141回 フランス・アラカルトの予告：(9/13) 登大路ホテル奈良にてフランス料理の会食会 8月発行の「Mon Nara 通信」にて案内

第47回奈良日仏協会シネクラブ例会(6/24)の案内

★2018年6月24日(日) 13:30～17:00 ★奈良市西部公民館 5階第4講座室

★プログラム：『サムライ』(Le Samourai, 1967年, 105分) ★監督：ジャン＝ピエール・メルヴィル

Jean-Pierre Merville ★参加費：会員無料、一般300円 ★飲み会：例会終了後「味楽座」にて

★問い合わせ：Nasai206@gmail.com (予約不要) ★『パリの灯は遠く』、『仁義』に続くアラン・ドロンの特集第三弾。ハード・ボイルド、サスペンスを描くフィルム・ノワールの傑作。削ぎ落とされた言葉と、人物の所作、表情、眼の動きを執拗に捉える映像で、プロの殺し屋対警察の息詰まる戦いが描かれています。(杉谷)



《2018年度第2回理事会報告》.....事務局 日時：2018年5月31日(木) 15:00～16:45。

場所：放送大学奈良学習センターZ306号室。出席者：三野、ジャメ、浅井、藤村、中辻、高松、大内、喜多、藺田、杉谷。議題1. 2018年度会員数：新入会6、再入会1、退会1、89件中27件未納。議題2. 3/15理事会後の活動：フランス語会話講座スタート(4/26, 5/24)、第139回フランスアラカルト「ジョラン・フェレリさんを迎えて」(5/27)。議題3. 今後の行事：第47回シネクラブ例会『サムライ』(6/24)、第140回フランスアラカルト「フランス・オペラ紹介」(7/21)、第48回シネクラブ例会(9/9 又は 9/23)、第141回フランスアラカルト「登大路ホテル奈良にてフランス料理会食会」(9/13)、2018年度ガイドクラブ「吉野宮滝散策、福西和紙本舗見学」(10/13)、興福寺ギメ美術館出陳記念慶讃コンサート(10/28)、第142回フランス・アラカルト(11月上旬で日程調整)、秋の教養講座(11/23) 講師村田京子・放送大学奈良学習センター共催、第49回日仏シネクラブ例会「アラン・ドロンの特集④」(11/25)。議題4. Mon Nara。議題5. その他：奈良日仏協会25周年記念行事について意見交換、美術クラブ鑑賞会：「プーシキン美術館展～旅するフランス絵画」企画承認、次回理事会7月19日(木) 15:00～16:30 Z306号室にて。



編集後記 ☆1998年10月から約4ヶ月、エクス・アン・プロヴァンスの大学付属の外国人向けフランス語コースに通っていた時、「教会建築」に関する授業で「プロヴァンスの三姉妹」とも称されるシルヴァカンヌ、セナンク、ル・トロネの3つのシトー会の修道院の簡素さを特徴とするロマネスク建築のことを学びました。冬休みにさっそくそれら3つの修道院を訪れたのですが、セナンク修道院ではラベンダー(lavande)の花が咲いていなくて、がっかりしたことを覚えています。12月ですので当然といえば当然なのですが、「セナンク」といえば「ラヴェンダーの花畑」とばかりにイメージを膨らませていたので、花の季節のことなどすっかり失念していたのです。今頃はきっと、紫色のラベンダーの花が修道院の建物の前一面に広がっていることでしょう。最近では日本でもラベンダーの花をあちこちで目にするようになりました。それでも、どこか物足りなく感じてしまうのは、プロヴァンスの田舎の鄙びた修道院の建物を想い浮かべてしまうからかもしれません。(N. Asai)

◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。

◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。次号は**9月30日**が原稿締切日です。

◆会員の皆様で**Mon Nara にチラシ同封を希望される方**は、1)内容がフランスに関わるもの、2)本人又は代理の方が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2018年6月号 numéro286

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング葉宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司